

日本比較文化学会中部支部
令和7年度（2025年度）例会・総会

発表抄録

日時 2026（令和8）年3月21日（土）

会場 ガレッソホール（新潟市・コープシティ花園）

*オンライン（Zoom）同時開催

日本比較文化学会中部支部 令和7年度（2025年度）例会・総会の御案内

日時：2026（令和8）年3月21日（土）10:00～17:00（予定）

会場：ガレツソホール（新潟市・コープシティ花園）

〒950-0086 新潟市中央区花園1-2-2 4階（「東横INN新潟駅前」と同じ建物）

統括責任者：樋口謙一郎（日本比較文化学会中部支部長）

*対面とオンラインのハイブリッドといたしますが、オンライン用の機材やネットワークの不調などの事態が生じて中止や中断などはせず、対面（会場）の進行を優先します。

*オンラインでの参加をご希望の方には3月20日（金）までにZoomリンクをお送りします。オンラインでの聴講をご希望の方は同日15時までに、上記統括責任者までメール(higuchi@sugiyama-u.ac.jp)でお申込みください。

（当日のお申込みの場合、即時に対応できない場合がありますのでご了承ください。）

プログラム

（総司会：小島明子）

10:00 開場

10:40-10:50 開会の辞（中部支部長：樋口謙一郎）

10:50-11:00 休憩（発表準備・時間調整）

11:00-12:00 自由研究発表（進行：長谷川千春）

- ・二村洋輔（名城大学）「南方徴用作家としての佐多稲子とその表象における問題」
- ・樋口謙一郎（椛山女学園大学）「白丁のことばと接触構造の変化：暗号的言語実践の成立条件に関する予備的考察」

12:00-12:30 総会

12:30-14:00 昼食休憩

14:00-14:45 基調講演

高橋秀樹先生（新潟大学）

三つの古典文学の「未代」—『平家物語』、『労働と日』、古代エジプト第一中間期文芸—

14:45-15:00 休憩（発表準備・時間調整）

15:00-16:00 自由研究発表（進行：二村洋輔）

- ・長谷川千春（至学館大学）「騎士道表象と研究史：西洋中世の理想道徳の越境的展開をめぐって」
- ・澤田敬人（静岡県立大学）「オーストラリアにおける文化産業の復興への批判的介入」

16:00 閉会の辞（日本比較文化学会会長：澤田敬人）

三つの古典文学の「末代」
— 『平家物語』、『労働と日』、古代エジプト第一中間期文芸—

高橋 秀樹
新潟大学

13世紀中ごろに成立したとみられる『平家物語』は、1918年に英訳され、1920年代から30年代にかけて全巻英訳が出た『源氏物語』と共に、日本文学の古典として世界的に知られている。欧米圏でも日本でも、『平家物語』は古代ギリシアの『イーリアス』のような「叙事詩」と比べられがちだった。戦争を主題としており、「語られる（演誦される）」文芸であるといった共通点があるためであったろう。

このような見方に疑問を投げかけ、『平家物語』を改めて世界の戦争文学群の一つとして分析し、その特性を見極めようとしたのが日下力である。2003年からその作業を進め、世界の四十あまりのいくさを題材とした言語作品と比較し、『平家物語』の文学性を相対化しようと試み、2017年に次のような結論を示している（日下力『「平家物語」という世界文学』笠間書院2017年、「エピローグ 東洋と西洋と」pp.219～227.）。

『平家物語』は戦争の文学として優れている。兵士の職務遂行に付随する罪悪性を自覚したり、意図せずして犯した罪の責任を問われることに抗したり、我が子を見殺しにしても生き延びようとする自らをおぞましく思う心理を描く深さを有する点で、前近代の戦争文学の中で他に例を見ない。だが、『平家物語』には大きな欠落がある。そもそも戦いを起こすことに対する疑問、愚かにも何ゆえ戦ったのかという、ギリシア悲劇的な問いかけがなく、戦争という現実を受容することが先行して、批判的に物事を見る姿勢が薄弱である。その背景には、東洋には、戦いの現実を不可避的な歴史の実態として受容する精神が、底流として伏在しているということがある。その精神は、日本の場合、インドに淵源を持つ仏教によって維持されてきたと考えられる。

このような日下氏の分析について、『平家物語』の戦争文学としての卓越性と欠落について、報告者は特に異を唱えるものではなく、大いに賛同する。しかし、その理由を、東洋と西洋の違い、日本における仏教の影響に求める点については、今一步踏み込んで比較文化論的分析を行う必要があるのではないかと考えている。

『平家物語』が書かれた動機としては、なぜ帝と貴族が政権を握っていた体制が転倒し、武士が実権を握る事態になってしまったのか、という同時代人の深刻な疑問が指摘されてきた。だからこそ、『平家物語』は、平家滅亡の直後ではなく、それから半世紀ほど経た承久の乱の頃に、『保元物語』や『平治物語』と同じ時期に成立したと言われている。そして、『平家物語』には、「末法」「末代」という言葉が頻繁に現れる。

つまり、没落の時代に戦乱が避けられない現実として在って、その結果として、永遠不変だと思われていた社会秩序の大前提が崩れていくという見方（諸行無常）が『平家物語』の通奏低音を成しているが、そのような時代観は西洋の古代文芸にも例があり、洋の東西の違いで整理できることではないように思われる。かかる事例を、紀元前8世紀の古代ギリシアの文芸作品と、紀元前22～21世紀の古代エジプトの文芸作品から取り上げ、それぞれの特性を考えてみたい。

南方徴用作家としての佐多稲子とその表象における問題

二村 洋輔
名城大学

佐多稲子は長崎出身の作家であり、代表作として『キャラメル工場から』などを残し、1920～30年代のプロレタリア文学運動の中で重要な役割を果たした作家の一人であり、日本近代文学史においても注目すべき位置を占めている。

しかしながら、他の南方徴用作家たちと同様に、佐多稲子もその戦時期の活動や思想的立場が現代においては忘却されてしまった作家の一人であると言える。プロレタリア作家や女性文学者としての側面はこれまで検討されてきたものの、彼女の戦時期の活動や作品については、十分に検討されてきたとは言い難い状況がある。

本発表の目的は、まず佐多稲子の文学活動を概括し、その作品や思想がこれまでどのように評価・研究されてきたのかを整理したうえで、彼女が現在どのような作家として位置づけられているのかを検討することである。特に本発表では、文学研究の枠組みに加えて、地域社会における文学者の記憶や文化的表象という観点にも着目する。すなわち、彼女の出身地である長崎において、佐多稲子という作家がどのような存在として認識され、どのような形で文化的に位置づけられているのかを探ることを試みる。

その手がかりとして、本発表では先日実施した長崎での現地調査の成果を取り上げる。具体的には、長崎市内の主要な公共文化施設である長崎市立図書館および長崎県立長崎図書館郷土資料センターに所蔵されている佐多稲子関連資料を対象とし、これらの施設において彼女の作品がどのように収蔵・分類されているのかを概観する。そして、それらが置かれている書架や展示空間、資料分類の位置づけなどに注目しながら、佐多稲子の作品がどのような文脈の中で提示されているのかを分析する。図書館という知識の保存・提示の場における配置や分類は、文学者の文化的評価や地域的記憶のあり方を示す一つの指標となり得るからである。

以上の検討を通じて、本発表では佐多稲子という作家の文学史的評価を再確認するとともに、地域社会における作家の記憶の形成過程についても考察する。さらに、文学研究と地域文化研究を接続する視点から、地方における文学者の受容や表象のあり方について新たな問題提起を行うことを目指す。

白丁のことばと接触構造の変化：暗号的言語実践の成立条件に関する予備的考察

樋口 謙一郎
相山女学園大学

本発表は、朝鮮社会の被差別集団である白丁（백정）のことばを、暗号的言語実践の成立条件という観点から再検討するものである。白丁をめぐっては、朝鮮王朝期の身分秩序のもとで社会的最下層に位置づけられ、屠殺や皮革加工など特定の職業と強く結びつけられながら、居住、婚姻、教育などの諸領域において制約を受けてきたことが知られている。他方で、白丁のあいだには独自のことばの実践が存在したとされるにもかかわらず、その研究は十分に進展してきたとは言い難い。こうした停滞は、単なる資料不足だけでなく、差別の歴史と結びついた言語実践が、そもそも研究対象として可視化されにくかったこととも関わっていると考えられる。したがって本発表では、白丁のことばを、語彙の有無や量の問題としてではなく、いかなる社会的条件のもとで成立し、維持され、変容してきたのかという問題として捉えることを試みる。

本発表では、この問題を考える視角として、アイルランドの移動民アイリッシュ・トラヴェラーが用いるシェルタ語研究を参照する。シェルタ語は、外部者に理解されにくい語彙体系を含む暗号的言語実践として知られており、その存続や変容は、話者数や継承率だけではなく、外部社会との接触場面や社会的境界の変化とも深く関わっている。この点は、差別や排除と結びついたことばの実践を考える際に、言語そのものの内部変化だけでなく、それが必要とされる社会的条件に目を向ける必要があることを示唆している。こうした示唆を踏まえ、本発表では「接触構造」という作業概念を導入し、白丁のことばがどのような社会的接触のもとで形成され、また近代以降の身分制度の解体、制度的浸透、都市化、差別の不可視化といった変化のなかで、その成立条件をどのように変容させたのかを考察する。

本発表の目的は、アイリッシュ・トラヴェラーと白丁を直接比較することではない。むしろ、差別と境界維持の歴史のなかで形成された言語実践を、その再生産条件の変化という観点から捉え直すための分析視角を提示する点にある。そのため本発表では、白丁のことばを、特定の接触場面に支えられて成立し、社会的接触の再編のなかでその機能や使用条件を変えてきた言語実践として位置づける。そして、そのような観点から、現在確認される語彙資料を、かつての言語実践の全体そのものではなく、歴史的变化のなかで相対的に残りやすかった痕跡として読む可能性を検討する。

騎士道表象と研究史：西洋中世の理想道德の越境的展開をめぐって

長谷川 千春
至学館大学

本発表では、中世ヨーロッパにおいて発展した騎士の理想的道德体系である騎士道に着目し、それがいかに表象され、また研究されてきたかを検討する。これにより、騎士道がヨーロッパ内外において文化的・言語的に越境する装置としてどのように機能してきたかを明らかにする。

まず、騎士道の成文化の初期段階の例として、13世紀にラモン・ルル (Ramon Llull) がカタロニア語で著した『騎士道叙任の書』(*Le Livre de l'ordre de chevalerie*) を取り上げる。本書では、騎士叙任の儀礼において騎士が「キリストの戦士」としての役割を担うことが説かれている。さらに、14世紀フランスの騎士ジェフリー・チャーニー (Geoffroi de Charny) による『騎士道の書』(*Livre de Chevalerie*) を扱い、キリスト教倫理の影響を受けつつ、百年戦争の実戦経験を踏まえた実践的騎士道論としての性格を考察する。さらに15世紀には、サー・トマス・マロリー (Thomas Malory) の『アーサー王の死』(*Le Morte Darthur*) を取り上げ、それまでの騎士道的慣習を背景に、アーサー王伝説や中世ロマンスと融合した騎士道表象を分析する。

このように、中世において言語的・文化的に越境しつつ多様に表象された騎士道を検討すると、まず戦闘行為そのものの普遍性が浮かび上がる。時代や地域の差異はあれ、いずれの社会にも争いや戦争が存在し、それに従事する戦士の倫理や理想像が形成されてきた。こうした戦士のあり方は、英雄的あるいは暴力的といった多様な形で成文化され、文学や思想など様々な媒体を通じて今日まで伝えられている。しかし、その表象のあり方や研究史を比較文化的視点から読み解くと、戦闘行為を宗教や哲学によって正当化しようとする傾向が見出される。

以上を踏まえ、本発表では、従来は中世研究あるいは中世主義研究の一環として扱われることの多かった騎士道および騎士道研究に比較文化的視点を導入し、ヨーロッパ内部においても揺れ動く道德規範としての騎士道が、ヨーロッパ外の戦士の理想像とも比較可能な普遍性と文化的可変性を併せ持つ概念であることを論じる。

オーストラリアにおける文化産業の復興への批判的介入

澤田 敬人

静岡県立大学

オーストラリアの映画産業は20世紀半ばにアメリカハリウッド映画に席卷され縮小した。1970年代には国をあげて映画産業の復興を試みた。19世紀末より始まるオーストラリアの映画産業を、映画の批評家は、映画黎明期、縮小の時代から復興を経て多様化する産業様態の変化に対してオーストラリア映画産業の「カメレオン風の性質」と評し、映画製作の自由市場と評するアメリカハリウッドとの明確な違いを強調する。

批評家だけでなく、オーストラリアにおける大学の人文学においては、オーストラリアの文化産業に国が注力することについての批判的な介入を20世紀後半に始めた。オーストラリアンスタディーズの領域での通説では、オーストラリアのナショナリズムは19世紀終盤に始まり、20世紀以降の戦争ナショナリズムの時代を除くと、戦後の経済的繁栄を享受した1950年代に「オーストラリア的性質とは何か」を旧宗主国イギリスとの違いで追求する左翼ナショナリズムの様相を呈したとしている。この戦後の経済的繁栄はアメリカの後塵を拝する水準であり、映画産業においてはアメリカハリウッド映画の海外興行によりオーストラリア全土の上映網もろとも浸食されてゆく。

この映画産業の衰退をめぐりオーストラリア連邦政府が注目し復興の支援を試みるには政府なりの政策的含意がある。映画はたとえコンテンツがフィクションに基づくものであっても世界マーケットでの興行ビジネスでは全く問題ない。オーストラリアのイメージを国外に売るのであり、国内ではそうした国外での国家マイメージのビジネスが行われていることを周知し、国際化の中でのナショナルな意識を国民に植え付けることに資する、という狙いがある。それに対してオーストラリアの大学における人文学が批判的介入を試みる。ヨーロッパからの入植社会に見られがちな遅ればせの国民国家建設と国民文化形成の動きへの批判的介入であると考えられ、映画産業の批評家が評する「カメレオン風の性質」とは一線を画する観点である。

本研究発表では、オーストラリア映画産業の復興に向けた政府機関の新設と増設を中心に整理し、批判的に国の狙いを明確にしなが、オーストラリアの人文学におけるカルチュラルスタディーズの展開と並行させて理解し、オーストラリアに独自の文脈があることを明らかにする。